伝教大師の法華研鑽について（続編）

――真撰を中心として――

桃井観城

研鑽の伝承について

伝教大師最澄の撰述として伝わるもの、凡そ一二二部を数えるが、その内真撰は六九部、後世の偽作は二六部、真偽未決は二七部である。今ここでは真撰中法華に関するもの五三部を資料として、最澄の法華研鑽について考えることとする。

先の「伝教大師の法華研鑽について」（立正史学二八号・桂林学叢五号）はその副題に示すように、彼の入唐将来目録（延暦二四年・八〇五）を中心にして述べた。それは彼の教学の伝承を探求する重要な課題であったが、それ等を基礎として日本天台を開立するに至る迄の、教学的な発展過程も亦重要な論題であり、その論題の中心となるべき法華教学について集約的に論述するためには、多くの撰述中特に法華に関する真撰のみを取材するものである。詳細は末尾の「真撰伝教大師法華研鑽年表」にまつものとする。

最澄の撰述と荆溪について

撰述の最初のものとしては、比枝寺中堂創建（延暦七・七八八）の前年の作である発願文に始まる。即ち、衆生救済の菩薩行を尽未来際まで休止せずと誓った学徒立志の文辞は、読者の肺腑を刺すものである。つづいて中堂落慶（延暦一三・七九四）更に平安遷都あり、延暦二〇年（八〇一）には南都の十大徳を請じて、法華十講法会を催し妙法普及の第一歩を踏み出さんとした「請十大徳書」を見るのである。

末法灯明記は通称この年に撰述されたものと伝えられるが、同書の真偽については学者によって異論のあるところである。上杉文秀の「日本天台史」（大正二・一九一三）には真撰、これを受けて獅子王円信は真撰と判定するも、この間に島地大等「天台教学史」（昭和四・一九二六）梅田円鈔共に真偽未決とするがいづれもこの書の出現時期は示さず未了のままであった。然るところ井上光貞は「中古天台と末法灯明記」（昭和四八・一九七三）に院政時代（一〇八六～一三三三）にできた……中古天台的なにおいを感じるが、中古天台の典籍が偽書としても無価値ではない、次の時代に法然・栄西・日蓮・親鸞等がこの一書に強い愛着を覚え、絶大なはげまし（思想的影響）を受けたものとしている。このように今尚ほ真偽未了の撰述は、その内容については、大いに鑽仰するところがあっても、真撰を中心としての論程には、今後いづれの書といえどもこれを割愛し、更に後日の研究にまつものとすることを了承されたい。

その翌延暦二一年（八〇二）八月高雄で法華を講じ入唐求法を請う上表を見た。その縁由するところは、前掲の小著にある如く、奈良時代に伝来した天台の諸著述を入手するもその写本に多くの誤字、脱字あるのみならず、南都の論宗は経文を引用するも経典そのものを所依とせず、天台の経は論の本、論は経の末なれば、彼自ら中国に赴いて親しく天台の典籍を伝え、法華経の深義を求め、天台宗に対する新たな知見により、我が仏教界に対する革新的な抱負

をもたらさんがために入唐求法の熱願となったのである。最澄は許されて延暦二三年（八〇四）請益僧（還学僧）即ち短期出張の研究員として入唐同翌二四年（八〇五）帰朝し、台州にて天台関係一二八部三四五巻と法具、越州にて天台、密教、雑部等一〇二部一一五巻、総じて二三〇部四六〇巻を得た目録を上表文と共に朝延に奉呈したのである。その内彼が法華経及び天台学に関するものを重伝（小著に掲載）したことは、誤字や脱字を訂正し補足すると共に、当時の法華研鑽が天台智者を中心として、更に奥義を究めんとしたことを物語るものである。その外に、一三部四二巻の法華経の註疏、殊には天台智者創説の止観法門を解明した荆渓湛然の註疏を多数初伝して、叡山仏教が偉彩を放ったことも前述の小著に論じたところである。

ここで最澄が初伝した荆渓のものをかえりみるに、玄義釈籤、文句疏記、妙法蓮華経大意（明曠・荆渓）、妙法蓮華経三昧補助儀、止観補行伝弘決、止観文句、止観義例、止観大意の八部で止観・文句は欠本しているが外は全部現存している。尚この外に最澄の将来せなかった荆渓の法華疏科文、摩訶止観大科文、同科文の三部は後に円仁智証によって伝来（八五八）し、更に法華文句科文、止観捜要記、十不二門等が智証録（八五八）に記され、読いて玄日録（九一四）にも法華玄義科文、法華大意、法華五百問論等を見るのみならず、涅槃再治録、方等懺補闕儀、維摩略疏、維摩経疏記等荆渓の述作が存在しているのである。

さて荆渓の著述の大部分は智顗の著作の註釈書で、即ち釈籤、記、補行等の所謂三大部の註釈をはじめ、維摩経疏記、観心誦経法記、法華三昧補助儀、三大部科文、止観大意、同義例、摩訶止観文句欠本、止観科等はその代表的なものである。更に後学を容易にするために、削略本（対他的論文）のあることを忘れてはならない。維摩経略疏が同経文疏の削略本であり、同様に止観大意が止観補行のそれであり、花厳骨目が八十花厳の削略本である。

それ等の著述の内容については「摩訶止観」に関するものが非常に多いのみならず、「止観補行」について見ても、

その引用例が日比宣正の「唐代天台学序説」によれば「玄義釈籤」に一五〇、「文句記」には一一七ケ所の多きに及ぶのである。ここに荆渓教学発展の基底には「止観補行伝弘決」のあることを窺うことが出来るのである。

かくして荆渓の教学の根底である「止観補行伝弘決」の完成後に、「止観大意」が出来たことはいうまでもないが、更に「補行」を研討してそのなかに引用された書目を見ると、内典は四五書目に及ぶこと（六条学報四九号）を知ると共に外典に二七書目をも数え該書の完成は畢生の大労作であった。又本書中に現われる人名は一六師であるが、前述の内典に新訳経が多く、その教観二門の教学が殆んどこれより出来たものと考えられるに反し、金剛智、善無畏、不空等新訳の人師を見ないことは、注意すべきである。

最澄は又「金錍論」を将来して、ここに荆渓独自の著述を初めて紹介したことも瞠目に値するものであった。その結果仏性遍在を説いて無性有情の無仏性論を排して、草木成仏により瓦礫非仏性論を説破される外、本書に記信論の真如随縁不変の説を、天台教義の解釈に依用するに至ったことは大きな特色である。

これをもって彼は大同四年（八〇九）一乗院、止観院に於て、始めて法華長講を奉修し一乗法を護り、日本国十方世界にその功徳は遍く五性皆成仏が期待され、弘仁三年の法華長講会式となり、三部長講へと発展したものである。

弘仁七年（八一五）には天台依憑の五宗十三師をあげて大師称号の所以を説く「依憑天台集」となり、天台法華実践の迫力は遂に「照権実鏡」の三権一実の論破、「守護章」の駁論、「法華去惑」の論陣となったのである。更に内にあっては六所に造塔して、日本国鎮護の祈願怠ることなく、休止するまもなく弘仁九年（八一八）より同一〇年（八一九）には「山家学生式」を制定して、教義の顕揚、僧風の粛正により、山内の清規、国宝の養成に全力を傾けたのである。このことを期して大同二年（八〇七）より弘仁一〇年（八一九）に至り天台法華宗の年分度者は二六名を数えるに至った。そこで「内証仏法血脈」によって、叡山円宗の学系と円戒運動の根拠を明かし、次いで「顕戒論」

「決権実論」を著わし「法華秀句」は、得一論争の最後の大作となったのである。

思うに弘仁一一年（八二〇）には両業（止観・遮那）の年分度者二八名を数えるも、その中比叡に在山するもの僅かに一〇人に満たざるは、遮那業の不備による一因あるも、内外の情勢に鑑み、遍えに戒坦建立の熱願を嵯峨天皇に奉上し（上顕戒論表）その本論は前出の「顕戒論」三巻となって、南都僧綱の反論二八失に精密な論旨を展開する大駁論を見たのである。然し最澄畢生一期の大事である戒坦独立の素願は容易に成就せず、最澄の滅後一七日即ち弘仁一三年六月一一日、允許の官符が下されたのである。

その翌年最澄の嗣法義真は伝戒師となり、堂々と円頓菩薩大戒の伝授を行い、大師の遺弟相倚り感泣の態思うに余りありと謂わん。ついで天長の勅撰により義真は「天台法華宗義集」一巻を淳和天皇に奉呈して、最澄開宗の宗義を明示した。即ち教観二門の上に最澄の教義である大戒の独立（顕戒論）、破権顕実（照権実鏡、守護国界章、決権実論、法華秀句）を説いたのである。ここに日本天台法華宗は天台、荆渓の純然無垢の祖承であり、その目的であった大乗戒坦独立のために、法華経はもとより、天台智者の教学の解釈を至上のものとしたことを知るに至ったのである。

今後の課題

以上大略最澄の法華研鑽を、その真撰を中心として概説したのであるが、そこには正像末を決し三時の破事僧を論ぜず、天台本覚思想の展開についても資料面の不備により割愛のやむなきに至ったのである。然しそれ等の教学のすべてが、最澄に出でずとしても日本天台の意義を失するものではなく、むしろその教学の発展史上に独自の教学が出現するものと思うのである。

そこで真撰六九部（法華関係五三部）は解決ずみとしても、あとに残る二七部の真偽未了の著作については、今後

各師の研究指導により一日も早く解明されて、天台教学が更に法灯増輝せられんことを切望するものである。今便宜上真偽未決の二七部を略記すると、

三仏礼誦文・根本中堂本尊事・華表額文(延暦二〇)・末法灯明記・在唐問答・応住持仏法事・正像末文・一乗戒建願記・比叡山相輪樑銘・面授口決・華表額文(弘仁一一)・註金剛錍論・合壇灌頂記・薬師儀軌・薬師如来念誦法・六天講義・灌頂伝授秘録・仏説七倶胝仏母准泥大明陀羅尼念誦法門・天台法華宗学生式問答・三宝住持集・山王略式・薬師如来講式・伝教大師毎日一千部法華大事・阿字賛語・伝教大師付法文・註仁王護国般若波羅密経・新開題

等、最澄の著作一般にも多くの課題が残されている。

その他に偽作として、牛頭法門要纂・修禅寺決・本理大綱集・五部血脈等の外にも著名なる書目が挙げられるのであるが今は割愛する。

終りに最澄撰述の真偽問題については、文学博士石田茂作先生をはじめ、獅子王円信大僧正、故　森観涛先生の御教示によるところ大なることを記して、その学恩を深謝するものである。